

# 親鸞仏教センター通信

2012.  
December

2012年12月1日発行  
 発行者 本多 弘之  
 編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）  
 〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7  
 TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901  
 e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp  
 ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

第43号

## 真宗と他者

親鸞仏教センター研究員 花園一実

最近、ある宗教学の先生が、浄土真宗の公共性について問題提起されている文章を拝見した。東日本大震災を受けて、多くの佛教者が現地において支援活動を行った。そのことの意義を大いに認めつつ、一方で佛教には、ボランティア活動などの公共的役割を果たすうえでの教理的な位置づけが未だ不明瞭ではないのか。特に浄土真宗では、他力念佛の教理を強調するとき、どうしてもそのような公共的活動が自力として退けられてしまう一面があるのではないかと、このような問題提起であった。

この問題に対して、「いや、それは真宗の何たるかを理解していない発言だ」と耳を塞ぎ、真宗とはあくまで「個の自覚の宗教である」と言い張ることはたやすい。蓮如は「往生は一人一人のしのぎなり」と言っているし、『歎異抄』には「ひとえに親鸞一人がためなりけり」という言葉もある。もちろん他者への関わりを蔑ろにするわけではないが、肝心な問題は一人ひとりが教えに出遇うということにあるのだと。しかし、そう言ってしまえば、この問題はそれで「おしまい」である。他所ではどうなっているかわからないけれど、とりあえず、私たちの宗派ではそのようになっている。だからこれ以上、議論の余地はない。

実を言えば、これは何より私自身がそのように考えていたのである。宗教はどこまでも「個」の問題、すなわち「自己の苦悩」という現実問題を離れて語られることは許されない。このことは今でも変わらない思いとしてあるが、ではその時、「他者」とは一体どこにいるのか。「個の自覚」こそが重要だと言われるその瞬間、「他者」の存在はどこかに流れで消えてしまっているのだろうか。逆に言えば「他者」が問題にならないところに、はたして本当に佛教とは成立するものなのだろうか。このことが、震災を経た今、大きな問題として自分のなかに生まれている。

かつて親鸞は、飢餓に苦しむ民衆を利益するため、自ら三部經を千部読誦することを試みたという。しかし、その行為に拭い切れない「自力の執心」を垣間見た親鸞は、苦悩のすえ読誦を中断し、他力をたのむ名号一つに専念した。後世を生きる私たちは、親鸞が「自力ではなく他力だ」と言ったその結論だけを切り出して、さもそれが親鸞思想の極致であるかのように鼓吹しがちであるが、それは大きな誤りであると思う。自ら民衆を強く思い、たとえ自力であろうが行動せずにはおれなかった、それこそが偽りない本当の親鸞の姿ではなかっただろうか。決して自力は無意味だと、離れた場所で念佛や書き物をしていたのではない。何より他者を考え、その他者との関わりのなかから、どうしても間に合わない人間の現実というものを、念佛の教えのなかに聞き取っていったその人こそが親鸞なのである。

だからこそ、私たちは凝り固まった机上の論理に埋没してはならない。「親鸞の思想にはこうある」ではなく、「親鸞ならどうするか」という、最もシンプルな問いに立ち返るべきではないだろうか。はたして真宗の教えは他者を救いえるのか。否、他者へのまなざしを忘れたところに、決して「一人」の自覚はありえないのである。

## 親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「淨土を求めさせたもの—『大無量寿經』を読む—」<sup>(23)</sup>

## 往相の回向と還相の回向

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「淨土を求めさせたもの—『大無量寿經』を読む—」の第53回、54回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第53回では「第二十三願と第二十四願」について、第54回では、「第二十五願と第二十六願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第52回から一部を紹介する。

(嘱託研究員 越部良一)

## ■ 往相の回向・大涅槃を得る

『教行信証』の「行巻」に非常に考え難い一連の言葉があります。「しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。知るべし」（『真宗聖典』192頁、東本願寺出版部。〈以下、『聖典』と略記〉）。そして、曇鸞和讃では「還相の回向とくことは利他教化の果をえしめ すなわち諸有に回入して 普賢の徳を修するなり」

（『聖典』492頁）と。「諸有」というのは迷いの世界、生死の世界です。如來の回向に值遇するということは、往相の回向と還相の回向に値遇する。往相の回向の利益として大涅槃にまで至る。それでおしまいかというと、おしまいではない。大涅槃を得れば普賢の徳を修すると。そのようなことは凡夫にできるはずがないから、死んでから淨土に往ったら還って来られると。以前はそう解釈したわけです。しかし、親鸞聖人は、そのように書いてはいないのです。

われわれが大涅槃を得るということを考えると、われわれは煩惱具足だから大涅槃などとても得られないと思います。しかし親鸞聖人は、曇鸞和讃で「往相の回向とくことは 弥陀の方便ときいたり 悲願の信行えしむれば 生死すなわち涅槃なり」（同上）と、往相回向の利益には大涅槃を得る、と言ってくださっている。ここに、親鸞聖人が語っておられることの、現代人ばかりでない、親鸞聖人の弟子にしてもなかなかわからない問題があったのではないかと思うのです。つまりわれわれは、時間的にも空間的にも、有限のなかに遠近感があったり、過去・現在・未来と時間が過ぎていく感覚があつたりして、そのなかでものを考えていきますから、いくら「すなわち」、「即」と言われても、今でない即だから、その次だろうと。わからないところはしようがないから死んだ後にしごけば、一応、事は済む。しかし、親鸞聖人はそうは言っていない。死んだら、とは「証卷」のどこにも書いていません。

これは私の了解なのですが、本願に帰する、このこと一つを信じようということが起こったときに、正定聚に住する。正定聚に住するということは、往相回向、還相回向の利益のはたらく場所になる。本願力を依り廻にして、私どもがこの煩惱の命を喜んで生きる力が与えられ、本願力を証明するような命が与えられてくるといいいうことです。ですから「光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず」と。衆禍の波が無くなるのではないけれど、それを転じていく生活が与えられてくる。そうすると、「速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を

証す」という意味をもつのだと思います。

われわれは「浄土」と教えられても、妄念としてどこか違うところにあると思い込んでいますから、こちらにいるのだから浄土には往ってはいないと考えるのですが、浄土は、教える世界、本願が莊嚴している世界ですから、どこかにある世界ではないのです。われわれは煩惱を地として煩惱の生活をしているので、浄土ではないのです。しかし、本願がはたらく世界を感じたら、そこが浄土なのです。そうすると、譬喻で言えば、足は煩惱の大地に立って、信心は浄土の功德を呼吸する。膝から下は泥田の中にあって、首から上は浄土を呼吸する。それが往相回向の信行を獲ることによって成り立つ信心生活なのではないかと思うのです。

### ■ 還相の回向・普賢菩薩の仕事

そうすると、その時に、時を隔てず、日を隔てず、大涅槃の利益と接し、大涅槃の利益と接するということは、もう、即、大涅槃のなかに還相の回向がはらいてくる。普賢菩薩の仕事は、衆生を仏道に入らしめる。つまり、凡夫として生きているのだけれども、本願を信じ喜んでいるということが何かのかたちで影響を及ぼすという生活もありえる。これは自分でやるのではありません。自分で光るのではないのですが、本願があると少し人間が楽になるのかなとか、信心を生きていると自由なのかなとか、何か感じさせるものがあるのです。法藏願心が人にはらいて、人を通してまた伝わっていくというようなことを起こしてくる。

本願力をいただいたものは、いただいただけでは済まない。いただくことができたならば、それが縁となって本願力はどうなものだろうかと語れば、またそれが縁となって知つてくださる方も現れてくるわけです。自分でやるのではないです。自分はどこまでもいただく立場です。いただくことを証明することはできます。人間が信じてたすかっていると、本願力がはたらくことが証明されますから、それで伝わっていくこともある。親鸞にとっては法然上

人が生きてくださっていた。親鸞が生きていれば、弟子がそれを見て生きていく。親鸞は、それは面々のおんはからいだと言います。私が伝えるわけではない、私の弟子ではないと。一人ひとりが本願を信ずるかどうかなのだと。本願がはたらくのです。

宗教的時間は「信の一念」、「今」です。いつかどうかなるという話を語ったら、これは宗教的時間ではありません。生死無常の時間です。宗教的時間は、千載の一遇、今、ここに出遇うか出遇わないかしかありません。今、涅槃を得なかったなら意味がない。今、信心を獲れば、往相回向の利益として必ず涅槃を与える、その「必ず」に出遇うのは、今なのです。そこに、普賢の徳を修するということが、その「必ず」の内容として、今、与えられる。自分でやるのではない。法藏願心のはたらきが自分を通してはたらくのです。

たゞ体は名号の信心です。体は名号なのですが、名号を信ずる心がなければ、名号ははらいていませんから、人間にはたらくときには名号の信心としてははたらく。これが、正像末和讃で「南無阿弥陀仏の回向の 恩徳広大不思議にてえにゆう 往相回向の利益には 還相回向に回入せり」(『聖典』504頁)と言われる内容なのではなかろうかと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

### 公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、下記のとおり公開（無料）で開催しています。

#### 記

日時：2012年12月17日(月)午後6時30分～9時

2013年 1月16日(火)午後6時30分～9時

2月 7日(水)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp/>

す。眞実である、と言えるのは、如来がその「名」において確かに、心から誓つてくださつていることの眞実性だけであつて、この事実を指して「至心」と言うのです。これに対し、私たち自身の「心」はどうでしよう。この世に生まれてから死ぬまで、いろいろなたちで湧きおこつてくる心に苦しみ、そこから逃れられる人など誰もいません。私たちの心は、「ああしたい」という欲望、「こゝなりたい」という願望に追い立てられることに始まつて、イライラしたり、我慢できずにカーッと腹が立つたり、あるいは人のことが気になつて一喜一憂、うらやんだり妬んだりする気持ちで一杯です。嘘偽りのない眞実の心だと混じりけのない純粹な想いだとか、そんなものはそもそも、私たち自身の内にはないので。自分からは何が眞実か、決して決めることはできません。どんなことでも私たちは、偏つた、濁りある眼でしか判断できないのですから。

## 原文

『大無量寿經』にわく、「設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我国 乃至十念 若不取正覺 唯除五逆 謹誹謗正法』文

「大無量壽經言」というは、如來の四十八願をときたまえる經なり。「設我得仏」というは、もしわれ佛をえたらんときとて御ことばなり。「十方衆生」というは、十方の、よろずの衆生というなり。「至心信樂」というは、至心は、眞実ともうすなり。眞実ともうすは、如來の御ちかいの眞実なるを至心ともうすなり。煩惱具足の衆生は、もとより眞実の心なし。清淨の心なし。濁惡邪見のゆえなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五一二頁)

## 参考

◆眞実（の心）  
今三心の字訓を案するに、眞実の心にして虚偽雜ねることなし、正直の心にして邪偽雜ねることなし。眞に知りぬ、疑問雜なきがゆえに、これを「信樂」と名づく。「信樂」はすなわちこれ一心なり。「心はすなわちこれ眞実信心なり」。

◆「至心」は、眞実ということばなり。眞実は阿弥陀如來の御ことばなり。他の聖教の言葉の一端をここに示す。

◆「大無量壽經言」というは、……

・如來の本願を説きて、經の宗教とす。すなわち、仏の名号をもつて、經の体とするなり。  
・如來世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願を説かんとなり。  
・五湯悪世の群生海、如來如実の言を信すべし。

(二〇四頁「行卷」「正信偈」)



凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。

(五四五頁「一念多念文意」)  
(訳:親鸞佛教センター)

## 『anjali』第24号および 『現代と親鸞』第25号を刊行

このたび、「anjali」第24号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第25号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第24号では、作家の天童荒太氏、J.T.生命誌研究館館長の中村桂子氏、有限会社ビッグ

イシューワ日本代表の佐野草二氏、大阪大学大学院人間科学研究科准教授の稻場圭信氏、東京藝術大学デザイン科教授アートディレクターの河北秀也氏、東レ経営研究所ダイバーシティ&ワーカラ

イフバランス研究部長の渥美由喜氏、医師の山浦玄嗣氏、大阪教育大学教授の岩田文昭氏、パリ第八大学心理学部准教授の小坂井敏晶氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第25号では研究論文のか、「現代と親鸞」から使い捨て時代を考える会相談役の植田浩氏の問題提起と質疑。

『教行信証』真仏土・化身土巻研究会から、哲学者で大阪大学名誉教授の大谷豊氏の講義と質疑。「第6回親鸞佛教センター研究交流サロン」から、筑波大学大学院人文社会学研究科教授の土井隆義氏の発題と大谷大学文学部教授の佐賀枝夏文氏のコメント。また、「公開講演会2011」から、北海道大学公共政策大学院准教授の中島吉志氏の基調講演と当センター研究員三名を交えてのディスカッションの様子。さらに、「親鸞思想の解明」から本多所長の問題提起(四講座分)を掲載しています。

## 『聖典』の試訳（現代語化）

『歎異抄』、『唯信鈔文意』に続き、当センターでは、『尊号真像銘文』の現代語化に取り組んでいる（概要については本誌四〇号参照）。

その冒頭を飾るのは、『無量寿經』にある「至心信樂の願文」である。『無量寿經』では法藏菩薩が、覺りを得るに先だって四十八の願い（本願）を説く。その十八番目に登場するのがこの願である。ただしこの願は、親鸞にとつて、いくつもある願のうちのひとつにすぎなかつたわけではない。師である法然がこの願を「王本願」と呼んで大切にしたように、親鸞にとつてもこの願は、「信心」を語る願として、最も大切な願であった。なぜ念仏するのか？ このように問うならば、親鸞ならば例え、「そこに、『私が今、ここにある』ということのすべてが尽くされているのだ」と応えるのではないだろうか。この問いは、「私はなぜ生きているのだろう」という問いによく似ている。この問い合わせが私たちは自身のなかにはたらいている。充実無限に広がるいのちの結びつきからの、「生きよ」という呼びかけが私たち自身のなかにはたらいている。充実した人生を送るためにはどうしたらよいだろうか、「どうしたら人を幸せにできるだろうか」というのが、私たちの日常的な発想である。しかし、今回の『銘文』が伝えてくるのは、このように自分であれこれと考へる以前に、「わが願いを信じて、念仏せよ」という如来の誓いが確かにあつたのだ、という感動である。『尊号真像銘文』最初の銘文は、親鸞の抱いた、この根源的な感動と共にあつた。

## 『尊号真像銘文』試訳①

### 現代語

## 『尊号真像銘文』試訳①

### 現代語

「大無量寿經言」というのは、『大無量寿經』という経が、阿弥陀如来の深い願い——私たちのありようをその生活の根っこから振り動かすような、本当に大切な願いである第十八の願——を四十八に開いて教えてくださつていて、ということです。『大無量寿經』は、ここに述べられている「信心」の願をこそ、「言わん」としているのです。

「設我得仏」というのは、「私が仏になつたときには、このようであつてほしい」という、あらゆる存在へと向けられた、如來からの願いの言葉です。

「十方衆生」というのは、どんな場所で生まれ、どんな環境で暮らしていようと関係なく、この世に生まれてきたすべてのものが、ということです。生きとし生けるあらゆるもののがみんな一緒に、と呼びかけられているのです。

「至心信樂」の「至心」とは、嘘や偽り、疑いなどがまつたくない、純粹な「眞実」のことです

### 親鸞佛教センターの動き

(2012・8・10) —抄出—

■2012年

8・1 第15回『尊号真像銘文』研究会

8・6 第54回（通算第105回）連続講座「親鸞思想の解説」（代田区・東京国際フォーラム）

8・8 第28回『教行信証』真仏土・化身土巻研究会

8・10 親鸞聖人「命日のつどい」

8・20 第13回英訳『教行信証』研究会

8・27 第16回『尊号真像銘文』研究会

8・30 第22回清沢満之研究会

8・1 機関紙『親鸞佛教センター通信』第42号を発行。

9・3 第17回『尊号真像銘文』研究会

9・4 第29回『教行信証』真仏土・化身土巻研究会

9・7 鈴木大拙（英訳『教行信証』改訂版刊行報告会

9・8 （真宗本廟（東本願寺））

9・14 宗教学芸第71回大会・皇學館大学）

9・14 親鸞聖人「命日のつどい」

9・28 第12回清沢満之研究会

10・1 人事發令（ステファン・グレイス団託研究員が発令）

10・12 親鸞聖人「命日のつどい」

10・15 第30回『教行信証』真仏土・化身土巻研究会

10・16 第14回英訳『教行信証』研究会

10・19 第19回『尊号真像銘文』研究会

10・26 第55回（通算・第106回）連続講座「親鸞思想の解説」（代田区・東京国際フォーラム）

10・26 第145回英訳『教行信証』研究会

10・26 第124回清沢満之研究会

鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版  
刊行記念インタビュー

**鈴木大拙  
『英訳 教行信証』  
改訂版を刊行**

—編集作業を振り返って—



『英訳 教行信証』が Oxford University Press, INC. から刊行された（本紙8面参照）。これまで、長きにわたりご尽力いただいた編集協力者の武田浩学氏、西村玲氏（共に公益財団法人中村元東方研究所研究員）にこれまでの作業を振り返っていただき、そのご苦労とこれからのお話について語っていただいた。

なお、発行までの経緯、編集内容の詳細については当センター発行『現代と親鸞』第24号の「刊行記念特集」並びに財団法人松ヶ岡文庫発行『松ヶ岡文庫研究年報』第25号掲載の、前田專學氏、武田氏連名の論文をぜひお読みいただきたい。

**■ 武田浩学氏へのインタビュー**

—編集作業を振り返って—

今回の事業の一番大きな目的は、大拙の息吹を再度世界に伝えることです。そのために、本文については手を加えないことを前提に作業したのですが、編集の途中、大拙の意図と異なると思われる箇所があったので、大拙が亡くなるまで修正を加えたといわれる「ラフドラフト」と照合しつつ精査しました。あとは、「序文」の掲載です。旧版には掲載されず、未完として『EB』誌に掲載された大拙の序文ですが、自筆の原稿や校正を注意深く見ると大拙が情熱を傾けて書かれたことがわかります。しかも、自筆の段階で結びの言葉があったので、協議の結果、これを最大限に尊重して完結した序文にしようということになり、細心の注意を払って編集し、掲載しました。その他にもさまざまな課題がありましたが、佐藤平先生（ロンドン仏教会理事）など、多くの方々からのご提言をいただき進めることができました。

私たちは、大拙が『教行信証』を英訳したということの意義をもっと知らなければならぬと思います。これは、「悟った人」の『教行信証』理解なのです。宗祖700回御遠忌の際の比叡山会議で、

曾我量深が大拙に、「それは先生は悟っているから…」と言う場面があります（『親鸞の世界』東本願寺出版部）。ちょっと聞くと冗談に聞こえますが、すごいシーンだと思います。浄土真宗の人ではないにもかかわらず、親鸞をとても評価している一流の人が『教行信証』を英訳してくれたという意義を取り間違えてはならないと思います。教団としてこのようなものをもっているのは、おそらく真宗大谷派だけではないでしょうか。

禪の大家の英訳、「悟った人」が訳した『教行信証』が身近にあるということは、かけがえのことです。とは言っても大拙のそのままの英訳をもっていないと意味がありませんから、編集の際にもそのように戻してあげようということで作業が進められたのです。

—大拙の思索に触れる

やはり「行」の訳語、「Living」についてです。以前から聞いてはいたのですが、実際にラフドラフトに手書きで、「Practice」、「Act」、「Living」の順にきちんと修正されていました。「Practice」は修行、「Act」は行為、それらをやめて「Living」にしています。「Living」は一般的には「生活」でしょうが、liveの文語には、宗教的な文脈の他動詞として、「実践する」の意味があります。大拙は文語に造詣が深いということを知っている大拙研究者は少なくないはずです。だから、現状では「Living」は「実践」だろうと考えています。大拙の真意がそうであったかは、今後も研究をつづけていくとして、いずれにしても、そのような重要な思索を最晩年、ラフドラフトがでてから亡くなるまでの短い間になされています。その思索の跡である自筆修正を目の当たりにしたときには強烈な印象を受けました。

—改訂版を読まれる方々へ

『教行信証』の参考書はたくさんありますが、大拙訳を除いたところで学んでほしくないです。私たちは、『教行信証』を学ぶにあたって、常に大拙訳を並べて、これでよいのか、悪いのかを考えなければならないと思います。難しいことですが、そのことによって殻に閉じこもらない広い視座をもち続けることができるのではないかでしょうか。晩年の大拙は、他に多くの仕事があったにもかかわらず、「死ぬ前にこれだけはやっておかなければならぬ」と、命がけでなされたのです。その情熱を伝え続けなければならぬと思います。

## ■ 西村玲氏へのインタビュー

### —グロッサリの項目選定

2005年の春に前田専學先生から今回のお話をいただきました。ちょうどその年にプリンストン大学に留学することが決まっていましたので、一旦はお断りしたのですが、前田先生から、鈴木大拙の『教行信証』を再版するにあたって、海外の学生にも読みよいものにしたいから、私がプリンストン大へ行くことが、かえって都合がよいというお話をだったので参加させていただきました。

その後、親鸞佛教センターから資料をお送りいただきて、私の受け入れ先のジャクリース・ストーン先生に相談したところ、グロッサリの项目的選定は、学部生には無理だろうということになりました。そして、まず私が項目をピックアップして、当時、博士課程におられたマイカ・アーバック先生（現在ミシガン大学准教授）にチェックしていただきながら項目案を選定して、親鸞佛教センターにお送りしました。

### —今回の『英訳 教行信証』の可能性

浄土教を学ぼうとする人は、マーク・プラム先生をはじめ、関わっていただいた海外の先生方の紹介で手にとられると思います。また、浄土教を学ぼうとする方のみならず、大拙研究にも大きな意味があるだろうと思います。

2000年代になってから、日本の近代仏教の見直しが進んでいます。大拙といえば、禅のイメージが強いのですが、その大拙が『教行信証』、親鸞の著書を英訳しているということが、今以上に知られることになれば、禅と念仏の関係が海外でまた読み直されるという可能性があります。さらに、大拙訳となると近代仏教の資料的な価値も出てきます。

私個人的にも、近代仏教の展開のなかで、大拙がキリスト教にどのように学んだかというヒントを、本書から学ばせていただこうと思っています。1900年代はじめのころに英訳された経典、英語で書かれた資料などの文献を読んでいますと、当時の宣教師がほとんど書いていますので、どうしてもキリスト教の文脈でしか語られない箇所が多くあります。大拙の時代はそれより少し下がりますが、それでも近い状況のなかで、仏教精神を伝えるために自分で訳語を作っていくことに、並々ならぬエネルギーを使われたのを感じています。

### —今後の『英訳 教行信証』への期待

訳されていない「真仏土巻」と「化身土巻」はどうするのかということが、まず気にかかります。しかし、大拙の代わりはいませんし、大拙訳

以外のものはたくさんありますから、屋上屋を架すよりも、これからさらに盛んになっていくであろう、大拙研究の結果とあわせて、『英訳 教行信証』についての論集が編まれて、出版されることを期待しています。門外漢の私が言うのもなんですが、英訳を行うことに労力を使うよりも、むしろ「大拙と念仏」、「大拙と真宗」といった本やシンポジウム等を開催したほうが研究者としては興味深いと思います。

妙好人の研究も禅に比べれば、まだまだ海外では注目されていないと思います。やはり、禅と念仏が通底しているということ、また、通底していくなぜ念仏が必要だったのか、必要とされてきたのかというところを、大拙の『英訳 教行信証』から学ぶことができるのではないかと思っています。

（文責：親鸞佛教センター）

## ■ プロフィール

**武田 浩学**（たけだ こうがく・編集協力者・中村元東方研究所研究員・真宗大谷派真實寺住職）

1964年生まれ。1987年早稲田大学第一文学部卒業、1987年大谷大学真宗学科編入学、1989年同大学卒業、1992年早稲田大学大学院東洋哲学専攻前期課程修了、1998年国際仏教学大学院大学入学、2003年同大学院大学修了。2004年財団法人東方研究会研究員就任。文学博士。

**西村 玲**（にしむら りょう・編集協力者・中村元東方研究所研究員・国際日本文化研究センター共同研究員）

1972年生まれ。1996年東北大学文学部史学科日本思想史専攻卒業、1998年同大学大学院文学研究科日本思想史専攻博士課程前期修了。2004年同大学大学院文学研究科日本思想史専攻博士課程後期修了。2004年財団法人東方研究会研究員就任。文学博士。

1973.6.30	鈴木大拙『英訳 教行信証』（旧版）刊行
2005.3.3	『英訳 教行信証』再版事業開始
6.21	前田専學氏へ熊谷宗憲宗務総長（当時）から監修に関して依頼
7. 1	前田専學氏が親鸞佛教センター客員研究員に就任
7. 7	財団法人松ヶ岡文庫と出版契約書を締結
同日	前田専學氏、ロルフ・ギープル氏、武田浩学氏、西村玲氏、常塚聰氏に編集業務を委嘱
8. 12	第1回編集会議開催（以降2011年7月27日の第20回まで開催）
2008.2. 1	マーク・プラム氏に編集業務を委託（同日客員研究員に就任）
2011.4.21	Oxford University Press, Inc. と出版契約書を締結
2012.9. 4	Oxford University Press, Inc. から改訂版刊行
9. 7	真宗本廟（東本願寺）にて刊行報告会開催



編集会議の様子。左から武田氏、常塚氏、西村氏、ギープル氏

## ■ 鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版刊行報告会を開催（2012年9月7日）

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の記念事業として、親鸞宗教センターが窓口となり取り組んできた、鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版が Oxford University Press, INC. より刊行され、9月7日（金）、真宗本廟（東本願寺）にて刊行報告会が開催された。

『英訳 教行信証』は、宗祖親鸞聖人七百回御遠忌に際して鈴木大拙師（1870～1966）が宗派からの依頼により、その英訳に着手され、師の没後、東方仏教徒協会（EBS）に編集が引き継がれ、1973年、親鸞聖人御誕生八百年を記念して刊行されたもの。

昨今、その入手が困難な状況にあったため、広く世界に公開できるように、大拙師の著作権を管理する財団法人松ヶ岡文庫や、編集協力者の皆様の絶大なご尽力のもと、改訂作業並びに出版社との交渉を行い、今回の刊行の運びとなった。

御影堂での報告会では、まず、監修者である前田専學氏（東京大学名誉教授・公益財団法人中村元東方研究所理事長）から、発行までの経緯などのご報告をいただいた後、『英訳 教行信証』が安原晃宗務総長に引き渡された（写真上）。

引き続き、応接室にて懇談会が開かれ、前田氏や松ヶ岡文庫評議員である鈴木省訓氏、編集協力者の一人であるマーク・ブラム氏（ニューヨーク州立大学教授）が、宗務総長並びに江尻參務と、これまでのご苦労や本事業の意義、本書にかかる期待などについて、広く意見交換を行った（写真下）。

なお、本書の宗派での取り扱いは、東本願寺出版部となります。

■ TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211 <http://books.higashihonganji.or.jp/> 價格 4,500円（税別）



## ■ 親鸞宗教センター研究員と読む——公開輪読会2012

### 「信すること・疑うこと」 参加者募集中！

2012年度の公開輪読会は、東京大学仏青会館（文京区・本郷）において、「信すること・疑うこと」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と一緒に仏教の聖典をひもとき、自己とは何か、人間はなぜ悩むのか、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思います。

初めてのお方もどうぞお気軽にご参加ください。（以下の詳細は、開催日程順です）

#### ■「難信と悲願—『教行信証』化身土巻を読む—」（全4回）

**【趣旨文】**はたして、人間のうえに本当に純粹な信仰とは成り立つか。親鸞が『教行信証』「化身土巻」で問い合わせたのは、この人間存在における尽きせぬ疑惑心の構造であった。信するものが救われるのではない。信すことのできないものこそが、本当に救われなければならない存在であるということを呼びかけ続けるのが、親鸞によって頭かにされた如来の悲願である。今回は「化身土巻」を通して、この難信と悲願の関係性について考えていただきたい。

日 時：2012年11月30日（金）、12月7日（金）

14日（金）、21日（金）

いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：花園一実（はなぞの かすみ）研究員

テキスト：『教行信証』「化身土巻」

（『真宗聖典』東本願寺出版部）より抜粋



資 料 代：500円（4回分）

#### ■「信念」とは何か—『精神界』を読む—（全4回）

**【趣旨文】**雑誌『精神界』所収の清沢満之の論文を講読する。明治という時代に彼らが掲げた精神主義とは、科学的ないし哲学的な枠組みによる思想ではなく、ひとつの「信念」であると表明された。それでは、その「信念」とは一体何であったのか。絶筆となつた「我信念」をはじめ、清沢の晩年の言葉を手がかりに解き明かしていただきたい。

日 時：2013年1月11日（金）、18日（金）

25日（金）、2月1日（金）

いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：春近 敬（はるちか たかし）研究員

テキスト：『精神界』所収論文

（『清沢満之全集六』岩波書店）より抜粋



資 料 代：500円（4回分）

#### ■「信の表現—『正像末和讃』を読む—」（全4回）

**【趣旨文】**親鸞聖人は実際に様々ななかたちの「表現」を残している。そこで語られていることの中心点は、いずれも「如來よりたまわりたる信」にこそあるわけであるが、では、聖人が抱いたこの信の自覚とその様々な表現とは、一体どのような関係にあるのだろうか。聖人晩年の作である『正像末和讃』を手がかりに、親鸞一人における信を「表現されるもの」という視点から考えてみたい。

日 時：2013年2月8日（金）、15日（金）

22日（金）、3月1日（金）

いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：内記 洸（ないき たけし）研究員

テキスト：『正像末和讃』

（『真宗聖典』東本願寺出版部）より抜粋



資 料 代：500円（4回分）

#### ■お申し込み

参加ご希望の方は、親鸞宗教センター公開輪読会2012係までご連絡ください。参加費は無料ですが、資料代をご負担願います。定員35名。連続12回の講座ですが、途中からの参加も受け付けます。

親鸞宗教センター

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

#### ■会場

東京大学仏青会館2階ホール  
(文京区本郷三丁目・日本信販ビル2階)



#### ●センター新スタッフの紹介

嘱託研究員

ステファン・P・グレイス

1977年ニュージーランド生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科仏教学専攻修士課程修了。現在、同大学院人文科学研究科仏教学専攻博士後期課程。